

馬糞がじゃがいもに見えた

岩手県 高橋隆男

満州へ浸攻したソ連は、関東軍が備蓄した莫大な糧秣のほか、開拓団や満人の米麦、コーリヤン等、根こそぎかき集めて自国に運んでも、多くは自国民に供し、働かせるために連れて来た日本人捕虜に与えた食糧はその一部で、生命を維持するにも足りない粗悪で少量だったのである。終戦の昭和二十年の冬から二十一年の二、三月初ろまでは最も悪く、捕虜への少ない食糧は横流しなどもあり、栄養失調や悪病の流行等で生命を失った大半はその時期だったのだ。

収容所内には炊事場が設けられ煮たきさされて配分されるのだったが、一人一日の量は少量の黒パンにコーリヤン等のスープが与えられるのだったが、ひどいときは、塩味の大豆煮のみが何日も続き、いくら飢えていても大豆食だとみな下痢症状になり、便所の中は赤色になるの

だった。また満州から持ち込んだもみがそのまま配分されてことがあったが、飯盒で煮て、口の中でかみしめ、殻をはき捨てるも容易なことではなく、水筒の中に入れて、棒でつき、米にしたりしたが、作業から帰ってからではその余力もなく、飯盒でもみ殻が炭化するまでいり、どうやら食うのだった。そのうちに炊事では松の木で土臼をつくり、玄米にして粥をつくって与えられた。

私どもは開戦以来、食うや食わずの戦闘を過ごして、入ソする前に体はすっかり衰弱し切っていたのに、生きる限界の粗悪で少量の食糧で二十一年一月ころは兵舎住まいの者はみな、肌はいえしなび、やせ細って小さく老化した身はテレビに映されたアフリカの飢餓の人のように体重は半分くらいになっていたであろう。顔のおおは骨が出っ張り、肋骨はすっかり現われ、腸はペコンと引っ込み、腕やもも肉はそれが関節だけが高くなっている。手首は親指と人差指で回ったものである。今手首を握って見て、本当だったのかと不思議にさえ思われるのである。それに寒さ、労働があった。そのころもし生きて帰れても、寿命は十年、二十年は縮まったであろう。

この思い、この苦しみに比べたら日本の監獄など楽なものだろう。俺は監獄のような所だって平気だとしみじみ思うのだった。

そうした中にも時折、白砂糖がさじ一、二杯くらいや、莖がらみ刻まれた煙草が与えられることもあったが、その煙草を巻いて吸う紙のある人も少なく、用便の始末は小枝を折った木片であった。

食事は班（十人くらいだったか）ごとに朝は黒パンにかゆ、もしくはスープで、昼食の分まで渡されるが、飢えている胃は我慢しきれず、だれしも全部食べてしまう。昼はだれからともなく言い伝わり、松の木の表皮の下の白い皮を斧でけずりと、飯盒に入れたき火にかけて煮ると醬油状のアクが出て、二、三回水を取り替え、昼までかけておくと繊維が軟らかくなって、白いカンピョウ状になる。それを食って空腸をわずかにいやす。夜はコーリヤンなどのかゆを班（十人くらいだったか）ごとに受け取り、各人に分配するのだが、夜の食事のときほど、真剣なときはなかった。松脂をたく明かりの下で、垢と松脂の油煙で猿面冠者のように塗りつぶされた

顔、頭髮とひげは伸びつ放し、爪は鋭く伸びた洗ったことのない手で、飯盒に分けられるのだが、真剣な顔の目はみなそれに注がれる。シャモジの力の入れ具合にも文句が出る始末、分配が終われば二段棚の体をやっと横たえるだけの自分の領分に座り、ゆっくりと一さじ、一さじ、時間をかけ飲み込んでやる。食事を終えて寝につくまでのつかの間の時間は、故郷の餅のこと、菓子をつくり方などだれかが話すことに、みな耳を傾け、思いをそらすのだった。

自家でつくっている米が一俵が今ここにあったら、一年に分けても一合ずつ食える。あああの米が欲しい。我が家の食卓を思い浮べて、ああ食いたい、食いたいと切ない妄想をめぐらす。眠りについても、夜半きまったころ、空腹のため目がさめる。食いたい、食いたいと思いつつも、切なさは、いまだに忘れることのできないことである。

収容所のそばに飼われていた馬の糞から一粒二粒の麦を拾って食べたのも、森林伐採作業の行き帰りは何かを探し求める様に、下のみ見て歩き、馬糞が馬鈴薯に見え

たのもそのころであつた。

精が尽き涙も枯れ果て、苦しさ悲しさも超越すれば、無気力な亡者ともなり、恐怖にもうとくなる。あの状態がいま少し続いたなら、重度の栄養失調で次々に死んだであろう。また人里離れた森林の中だったのが幸か、発疹チフスなどの悪病もなく、なんとか生きのびていた。それが二十一年三月ころから環境が幾らかずつ改善され、生きる最低の食糧も与えられるようになった。

シベリアに春が訪れたころ、林の中の乾燥きのことを探しあさったことも、白樺の若芽を夢中になって手でしごき、口に入れかみしめてうまかったことも、今はっきり残っている思いの一つである。

シベリアに入ってから、三、四か月くらいは野菜などろくに口にしたこともなかったし、入浴はおろか顔も洗わなかった。体の表面が紙でもはぐように取れたのは垢だったのか、死んだ表皮だったのが、入浴に連れていかれたのは暖かくなりだした二十一年の春ころであつた。毛ジラミ予防とのことで、陰毛やわき毛を剃られたのはそのころで、伸び放題の髪やひげはあの生活の中でどの

ように処理したかは思い出せないことである。ただはつきり記憶に残っていることは、体がやせて衰えるほど、シラミは増え、肌着はシラミの卵で養蚕の種紙のようにいっぱいになり、夜寝ていてかゆく、背中などに手をやると、血を吸い丸々と太ったシラミが爪にひっかかってくる。たまりかね起きて、中央にある赤く焼けているストーブの上に肌着を広げると、熱さでシラミがはい出すのを見はからって、強くふると、パチパチとゴマでもいるように音がしたものである。

シベリア収容所生活三か年の

病人と怪我人

栃木県 加藤 源四郎

二十年十二月 同じ中隊の高橋一等兵が夜中に腹痛をうったえ、さわがしくなった。軍医、軍医と誰かが言っていたので、自分も行つて見た。これは胃痙攣だ、俺がなおしてやる。